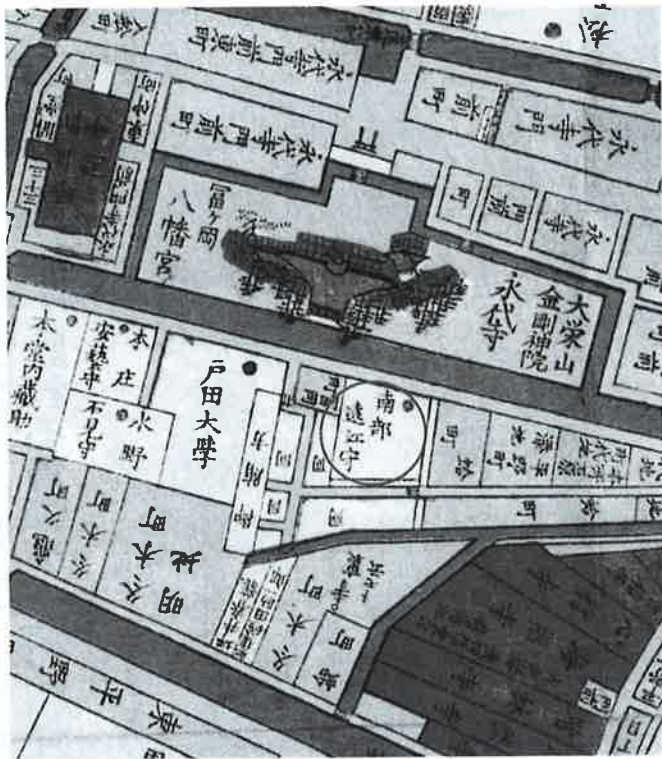


昨年末に起こった富岡八幡宮の事件は世間に衝撃を与えたが、同八幡宮周辺は青森県の歴史に関連する地である。

江戸時代の深川は縦横に水路が発達し、諸藩の蔵屋敷が建ち並ぶ商品流通の拠点であった。八戸藩の蔵屋敷も、富岡八幡宮と現深川不動尊のすぐ裏手（北側）に位置し、油堀という水路

に面した場所にあった。蔵屋敷とは、米や特産物などを収納・販売するための藩の施設をいう。

トラックがない時代、大量の物資を舟で運ぶためには水路が不可欠であり、蔵屋敷は水路の近くに置かれた。油堀は1975（昭和50）年に埋め立てられ、現在は首都高速道路が頭上を覆っている。交通体系の変



1862（文久2）年の江戸切絵図にみる八戸藩蔵屋敷

（図中、円で囲った「南部遠江守」部分。北が下）

『青森県史通史編2 近世』より転載

化を如実に物語っているようだ。

八戸藩の主な産物は大豆、干鰯・メ粕（イワシの油を取った跡の絞りかす。肥料に用いた）や鉄だった。これらの産物は、米があまり採れない八戸藩にとっては重要な財源であった。

産物は国元から江戸に太平洋海運を通じて運ばれ、蔵屋敷にいったん収納され、やがて関東一帯に販売され

富岡八幡宮の裏手にあった八戸藩蔵屋敷

中野渡 一 耕

（県民生活文化課 県史編さんグループ主幹）

ていった。干鰯やメ粕は蔵屋敷の近隣にあった「干鰯場」と呼ばれる干鰯問屋共有の競り場で相場状況を見ながら売却された。

大豆は蔵屋敷で入札された。取引商人は江戸で有名な干鰯問屋である湯浅屋与右衛門、栖原屋久次郎らであり、富岡八幡宮や、八戸市の龍神社・新羅神社には彼ら商人が奉納した狛犬が残っている。



干鰯場跡＝東京都江東区・中野渡撮影

八戸藩が江戸に蔵屋敷を設置したのはそれほど早い時期ではなく、1819（文政2）年に野村軍記による藩政改革が始

まってからである。野村は藩営の専売機関である「御調役所」の設置など国産品の販売に力を入れたが、その一環で蔵屋敷が置かれたと思われる。

敷地は町屋敷地を購入し、広さは最終的に1,141坪にもなった。現在の日通商事LSセンターあたりと考えられる。江戸には、藩の産物の出納・販売を請け負う「蔵元」と呼ばれる商

人がいたが、文政期にはさらに「御国産売捌取扱」という商人がおかれ、先述の栖原屋などが就任し、販売体制が強化されている。

このような蔵屋敷は、一族の盛岡藩は芝田町七丁目（現港区）に、東北の雄仙台藩は同じく深川にあった。弘前藩は日本海交易を通じた上方とのつながりが強かったせいも、江戸には蔵屋敷をおいておらず、大坂に蔵屋敷を持っていた。